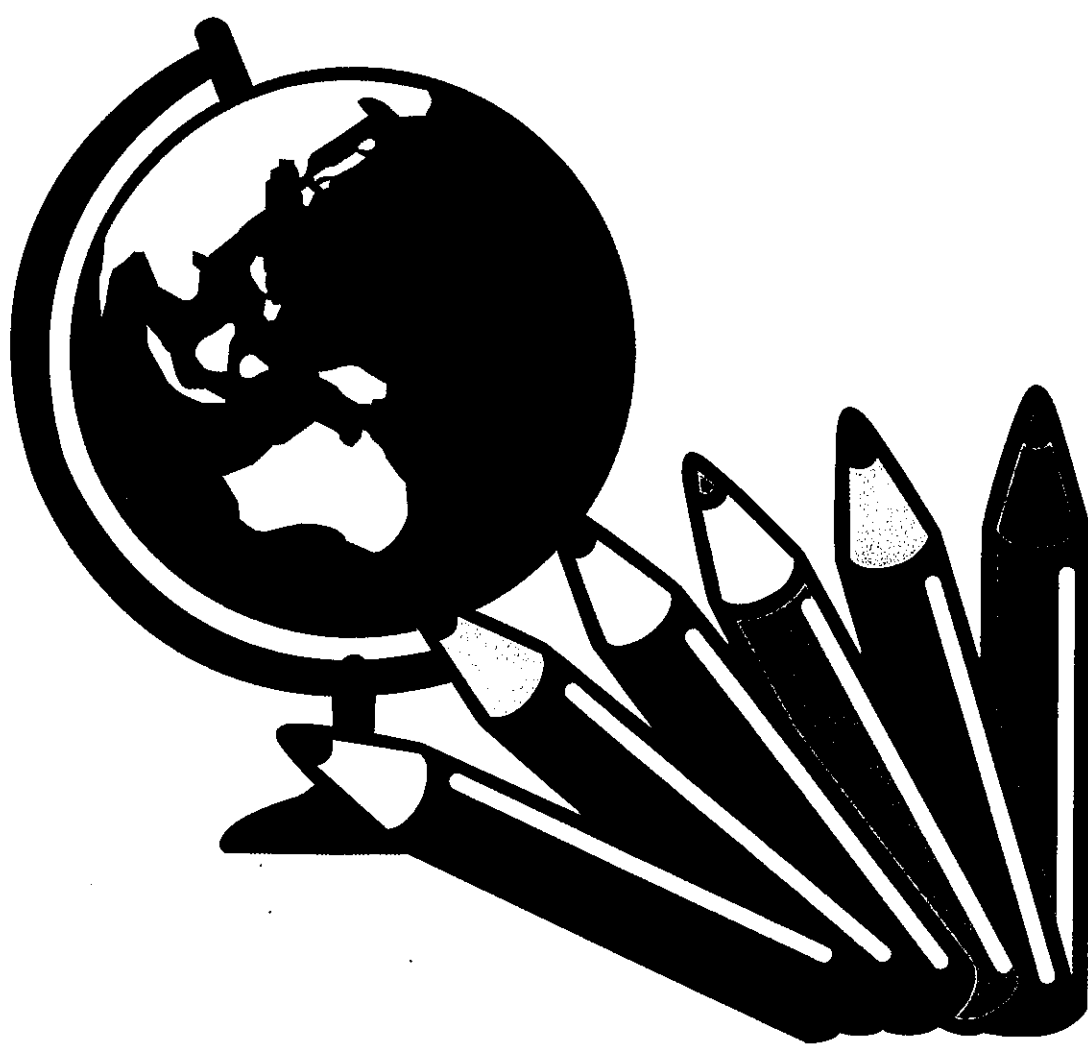


識字・日本語教室取組事例集



大阪府教育委員会

はじめに

大阪府内には、公共、民間を含めて様々な識字・日本語教室があり、学習者のためにたくさんの支援者が活動されています。大阪府が、大阪市、堺市や関係団体とともに構成する「大阪識字・日本語協議会」では、平成 27 年度に識字・日本語学習に関わる課題を『大阪府内における識字・日本語学習活動促進のための課題整理』としてとりまとめました。

大阪府教育庁では、この課題整理に基づいて課題の解決を図るべく、平成 28 年度より文化庁「『生活者としての外国人』のための日本語教育支援事業」を受託して、地域で活動する識字・日本語教室の支援力の強化に努めています。

このたび、大阪府識字・日本語教室支援力強化事業を実施する中で得た事例等をいくつか紹介するために『識字・日本語教室取組事例集』を作成しました。

1 章では、平成 29 年度「識字・日本語教室学習支援者 養成講座」で訪れた 3 つの教室の取組事例を紹介し、2 章では、システムコーディネーター¹が平成 28 年度及び 29 年度におこなった教室訪問等で得た、大阪府内の識字・日本語教室の課題解決に向けた取組みを課題別に紹介しています。3 章では、防災に関わる識字・日本語教室の取組を紹介するとともに、平成 29 年度「社会とつなぐ日本語教室運営講座」での「災害と外国人住民」ワークショップでの意見や、外国人住民向けの防災等に役立つウェブサイトを紹介しています。

この事例集が、識字・日本語教室に関わっている皆さまの参考となれば幸いです。

平成 30 年 3 月

大阪府教育庁市町村教育室
地 域 教 育 振 興 課

¹ システムコーディネーター：

府内を 5 つのエリア（豊能、三島、北河内、中・南河内、泉州）に分け、各エリアに 1 人配置しているコーディネーターのことで、エリア内の教室の支援者や市町村担当者等の連携を進める役割を担う。

目 次

はじめに

1 章 識字・日本語教室の取組事例 ―識字・日本語教室学習支援者 養成講座から―

- 1 高砂日本語教室 P 2
- 2 よみかき茶屋(ちゃや) P 3
- 3 とよなかにほんご・木(もく)ひる P 4

2 章 課題解決に向けた取組事例 ―各エリアの教室訪問から―

- 1 減少した学習者数減少を回復したい P 7
- 2 支援者の共通理解を図りたい P 8
- 3 受入可能な学習者数を増やしたい P 9
- 4 すべての支援者に運営に関わってもらいたい P 10
- 5 学習者からの相談に応えたい P 11
- 6 支援者を増やしたい P 12
- 7 母語対応がむずかしい学習者に対応したい P 13
- 8 子育て世代の学習者を支える支援者を見つけたい P 14
- 9 高校進学をめざす学習者に対応したい P 15
- 10 乳幼児を連れた学習者に対応したい P 16

3 章 防災に関わる取組事例

- 1 「防災体験バスツアー 地震・防災を体験しよう!」を企画 P 18
- 2 『外国人住民のための避難生活ガイドブック
(やさしい日本語版)』を発行 P 19

参考：教室で実施したこと、工夫したこと、考えていること

―社会とつなぐ教室運営講座から― P 20

参考：外国人住民向けの防災等に役立つウェブサイトの例 P 22

1 章 識字・日本語教室の取組事例

— 識字・日本語教室学習支援者 養成講座から —

識字・日本語教室学習支援者養成講座では、識字・日本語教室で学んだ外国につながりのある学習者が、自らの経験や母語を活かして、学習支援者として活動していくための基本的な考え方を学ぶため、以下の3つの教室を訪問しました。

1. 高砂日本語教室

— わたしが支援者になって学んだこと —

2. よみかき茶屋

— 教室での『学び』はだれのため、なんのため —

3. とよなかにほんご・木ひる

— 学びあうために大切なこと —

高砂日本語教室

(12月2日訪問)

成り立ち

八尾市にある高砂府営住宅には、中国帰国者が多く、日本語が壁となって日常生活でさまざまな不自由を抱えていた。そこで住民同士で理解したり、相談をうけたり、学びあう場が必要と考えた識字教室の学習者が平成16(2004)年に提起して、平成17(2005)年5月から高砂日本語教室がスタートした。帰国者だけでなく、中国出身の方も含めて、暮らしに直結した日本語を学べる場となり、毎週土曜日の夜、30人を超える人たちが集まっている。

大切にしていること

毎年4月に支援者に「大切にしたいこと(下記①～⑤)」を配付して、読み合わせ、確認をしている。これによって、教室の方針がぶれることなく活動が継続されている。

①中国の人が日常生活や仕事に必要な、暮らしに役立つ日本語を学べる場所です。

②高砂府営住宅が
いっそう暮らしやすくなるよう、いろいろな自治活動に参加することを
応援します。

③日本語の力に関係なく、誇りをもって生きられるようになることをめざします。

④うまく日本語を話せないと思っている人も安心して来て話せる、居心地のいい場所でありたいです。

⑤そんな目標のために、気持ちや考えを出し合いながら、みんなでいっしょに学ぶ全体学習会をもちます。

ここがポイント！ここから学んだ！

- ・中国出身の元学習者が、ボランティアで支援者として活躍している。日本語が堪能になった学習者が、サポートする側にまわるという循環ができている。
- ・日常生活の相談にあたっては、元学習者の中国出身ボランティアが、相談者と支援者の間にはいり相談をうけることもある。
- ・外国出身の支援者には次のような利点がある。
 - ① 込み入った相談時などは、母語・媒介語で話せるので、支援がしやすい。
 - ② 母国の価値観と日本の価値観との差異を踏まえた学習や相談の対応ができる。

(12月6日訪問)

成り立ち

国際識字年の平成2(1990)年5月、大阪市北市民教養ルームにおいて、12回の「にほんごよみかき」講座としてスタート。その後、大阪市の社会教育事業の講座として現在の形に至っている。

大切にしていること

「識字とは、基礎的な文字の読み書きを学ぶことだけでなく、進歩する社会に自ら参加できる知識や技術を養い、さらに社会の不合理を見抜いて改革していく意思と行動力を身につけることである」という国連教育科学文化機関(ユネスコ)が示す識字理念を活動の原点としており、教室が「共に学ぶ場、温かい居場所、ゆめをつむぐ拠点」となることをめざしている。

教室資料より作成

共に学ぶ場

- ・学習者も支援者も共に学び合う。
- ・日常生活での会話とよみかきの基礎学習
- ・基礎教育を十分に受けられなかった方や日本語初心者支援の重視
- ・生活、職業に役立つ言葉の基礎と人間形成を目標とする。

温かい居場所

- ・毎週同じ曜日で同じ時間に開催することで居場所となる。
- ・学習者の生活上の問題には常に留意し、相談、支援が行えるよう課題の共有化を図る。
- ・学びの場が自らを解放する場となりホッとできる場である。
- ・「語り合い」を重視

ゆめをつむぐ拠点

- ・大阪市社会教育施設識字学級モデル教室と位置づけられ、識字・日本語学習を発展させていく。
- ・地域社会にふれ体験的に理解を深める活動、運営をしている。
- ・生活、仕事、医療、法律、その他の相談、必要に応じて行政、専門機関、NPOなどに繋ぐネットワーク活動

ここがポイント!ここから学んだ!

- ・教室理念をもって活動し、外国人学習者も支援者に育てている。
- ・ボランティアは学習者と一緒に体験(協働)している。

とよなかにほんご 木(もく)ひる

(12月14日訪問)

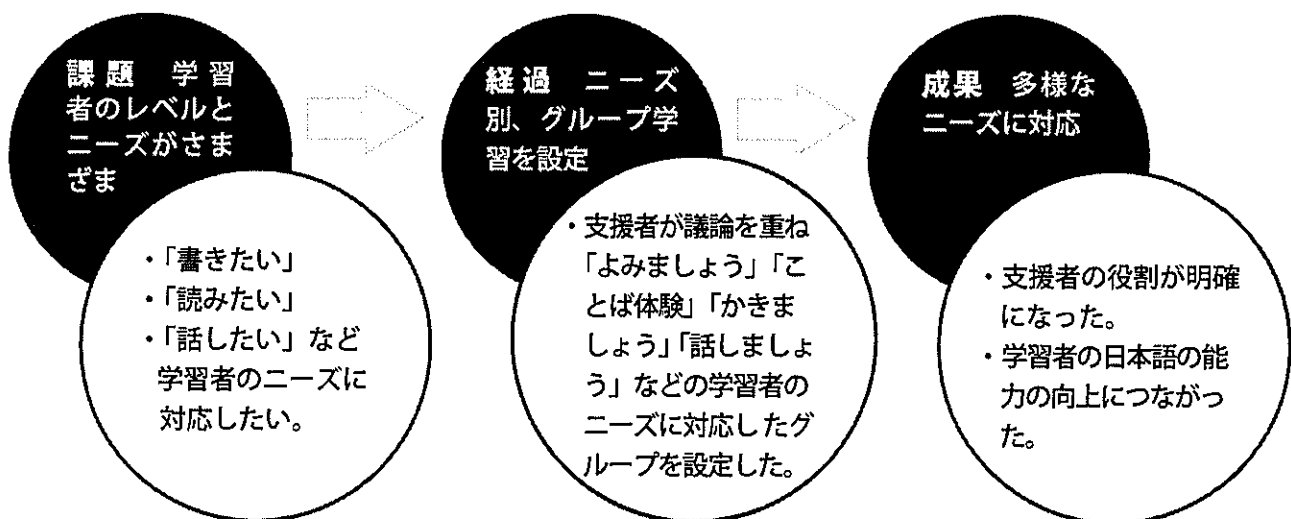
成り立ち

平成11(1999)年に国際交流協会でボランティアを集めてスタートした。地域の外国人とボランティアが出会い、日本語交流を通じて生活に必要な日本語を学び、豊かな人間関係を築く場をつくっている。

具体的な対応1

学習者のレベル、ニーズの違いにどう対応するか

この教室に来る学習者には、国際結婚をした人などさまざまな背景をもった人がいる。また、日本語のレベルも初心者から日常会話はできるという人まで、さまざまである。ニーズの面でも JLPT(日本語能力試験)のための勉強をしたい人、漢字を学びたい人、楽しみながら会話を練習したい人など、さまざまである。そういう学習者の様々なニーズに対応したいが、すべての学習者に対して個別対応となると支援者の負担も大きく、難しい。そこで工夫して、ニーズ別に分かれた独自のグループ学習のスタイルをとっている。



ここがポイント！ここから学んだ！

多様な学習者のニーズに対応できる独自の学習スタイルを作り出している。例として、前半はレベル別のテキスト学習。後半は「かきましよう」「はなしましよう」「よみましよう」「ことば体験」のグループに分かれて、学習。例えば、「ことば体験」のグループでは、近隣のスーパーやドラッグストアに実際に足を運んで、お店の方と日本語でのやり取りの練習をする活動もしている。

学習者の立場にたってグループ学習のスタイルを長い時間をかけて作ってきた教室である。

大切にしていること

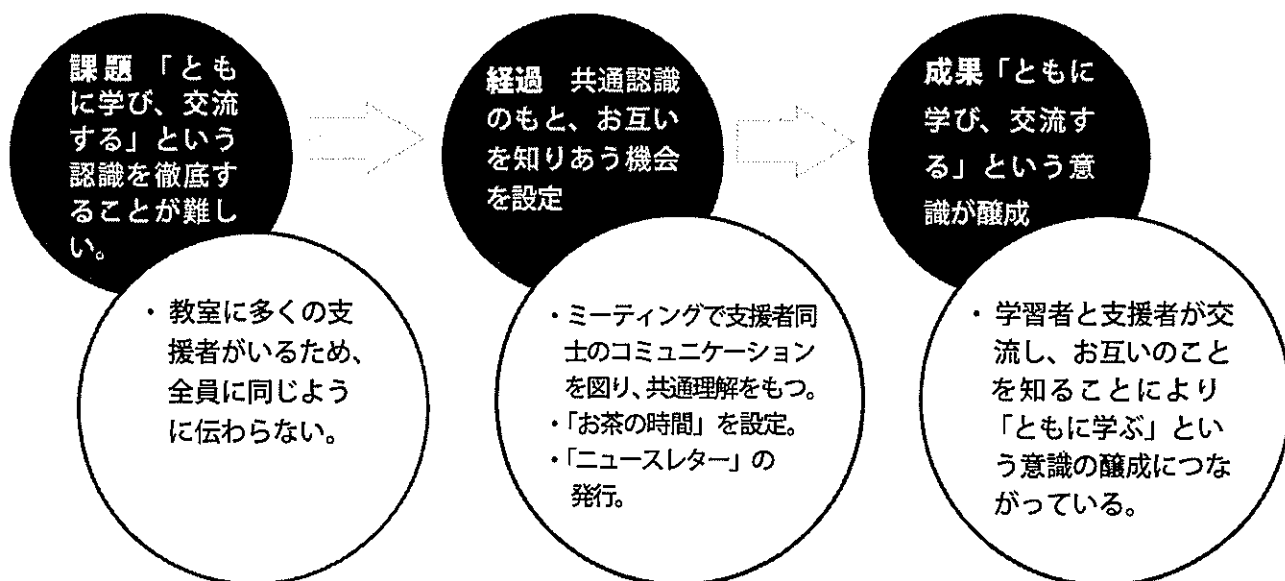
日本語を学ぶだけでなく、生活情報を得たり、「ひと」との出会いの場となったりする交流型の日本語教室をめざしている。ボランティアによる運営で、日本語を“教える－教えられる”という関係ではなく、支援者と学習者が共に学び、交流する関係の構築を大切にしている。

具体的な対応2

「ともに学び、交流する」という認識をどう浸透させるか

ミーティングで支援者同士のコミュニケーションを図り、支援者が活動の基盤となる「ともに学び、交流する」という認識の共有を図っている。その共通認識を具体化する要素を活動に組み込むようにしている。

例えば、グループ学習を導入したり、お茶を飲みながらリラックスして交流する時間を設けたりしている。さらに、教室独自のニュースレターを年4回発行して、学習者の作文や支援者の感想などを掲載し、支援者と学習者がお互いを知り合う機会としている。

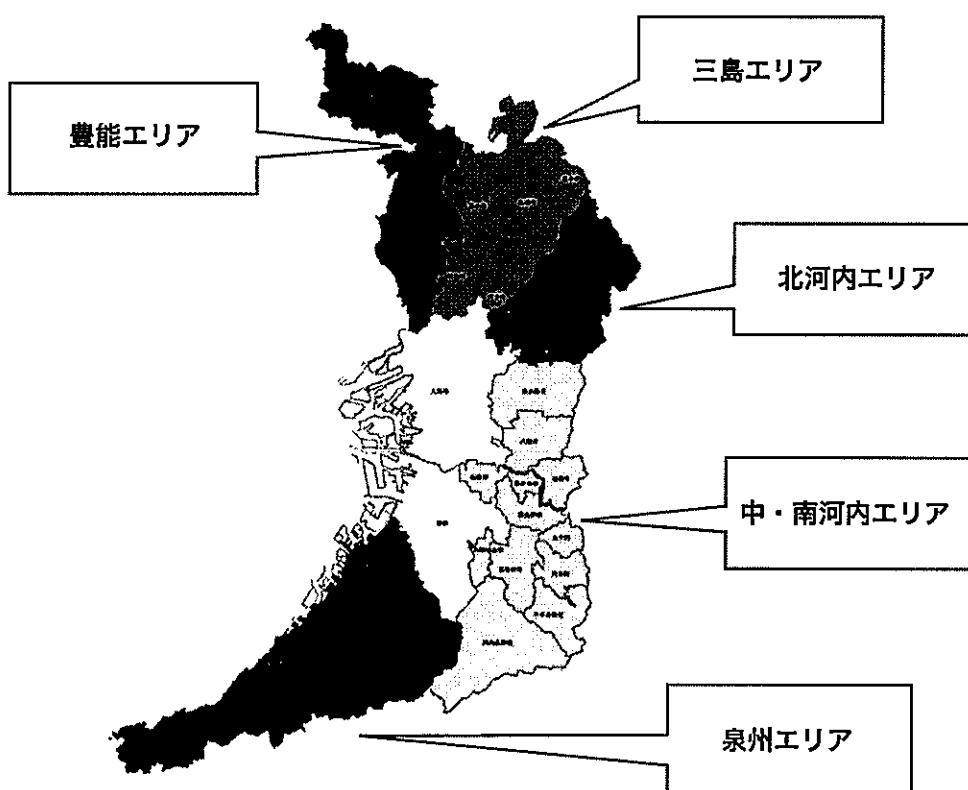


ここがポイント！ここから学んだ！

学習者と支援者が、お互いのことを知るさまざまな機会を設けて、交流を深めている。学習者が母国の好きな料理について嬉しそうに話し、支援者は楽しそうに聞いている様子からもグループが大切にしている「ともに学び、交流する」という姿勢を感じることができる。

2章 課題解決に向けた取組事例

ー各エリアの教室訪問からー



平成 28 年度・平成 29 年度 システムコーディネーター（敬称略）

豊能エリア	公益財団法人 箕面市国際交流協会	河合 大輔
三島エリア	多文化共生社会を考える会	島貫 清司
北河内エリア	多文化共生社会を考える会	松藤 昌代
中・南河内エリア	特定非営利活動法人 とんだばやし国際交流協会	内海 京子
泉州エリア	かいづか国際交流協会	岩田 光弘

事例 1

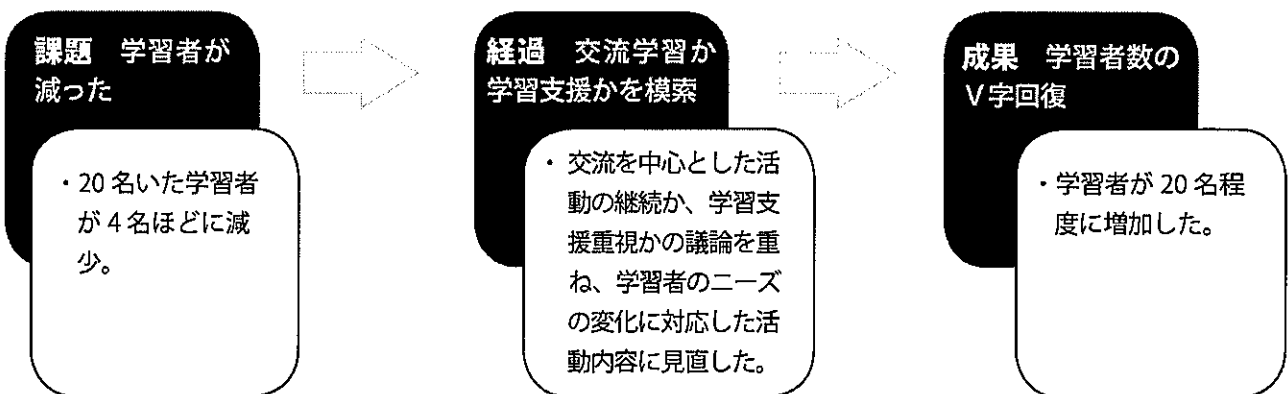
減少した学習者数を回復したい

—教室の活動内容を工夫し学習者数がV字回復—

事例のあらまし

この教室では、もともと交流を重視し、花見や遠足、七夕、料理会などイベントを中心に活動していた。しかし、平成 25（2013）年に開催場所を移動したこともあり、20 名いた学習者が 4 名ほどに減少。活動内容を再考せざるを得ない状況になった。

支援者の間では「交流を中心として続けたい」という意見と「学習ニーズにも対応しよう」という意見に分かれ、話し合いを重ねた結果、市民同士の交流という形は残しつつも、学習者が必要としている「日本語学習」を重視した支援活動に方向転換。次第に学習者の数も 20 名程度に回復した。



ここがポイント！ここから学んだ！

時代の変化とともに、学習者のニーズも変化している。「交流する」という教室の持ち味を大切にしながらも、学習者のニーズに教室の活動を合わせることで、学習者数が回復した。学習者の声を丁寧に聴きとることの大切さがわかる事例の一つ。

教室ひとくちメモ

箕面市国際交流協会交流型日本語学習支援 ひまわり

成り立ち 平成 20（2008）年に国際交流協会の事業としてスタートした。豊能エリアの日本語教室。

大切にしていること

- ・ 支援者との会話を中心に外国人市民の日本語学習への支援を行うとともに、活動を通して外国人市民が抱える課題解決に向けてともに学び、考える地域の居場所づくりを進めること。
- ・ 未就学児を連れて参加できる日本語学習の場づくり。

事例2

支援者の共通理解を図りたい

－話しやすい会議運営で共通理解を－

事例のあらまし

活動期間や世代も違う様々な支援者がボランティアとして関わっている。月に一度、全員参加のミーティングを行っているが、20名近い参加者がいるため、自分の気持ちを伝えることに消極的になる支援者が多く、会議が表面的な情報共有になりがちであった。

平成28(2016)年に4名のコーディネーターを選出した。全体ミーティングの前に、コーディネーターが議題の整理や課題の検討などを行う事前ミーティングをすることで、コーディネーター同士が共通認識を持って全体ミーティングに臨むことができるようになった。また、4人ずつの小グループで意見交換に取り組んだところ、日頃なかなか口に出しづらい不安や課題なども出てきた。発言しやすいミーティングにすることで、支援者全体の雰囲気も良くなり、活動や運営にも積極的にかかわるようになって、学習者に良い学習環境を提供できている。

課題 支援者の 共通理解がむずかしい

- ・支援者が言いたいことが言えないような表面的な会議になっていた。

経過 ミーティングの工夫

- ・コーディネート役を設置し、小グループで意見交換する場を設定。
- ・事前ミーティングを実施。

成果 支援者の中に グループ意識が芽生えた

- ・支援者全体の雰囲気がよくなり、支援者それぞれが、活動や運営にも積極的に参加するようになった。

ここがポイント！ここから学んだ！

ミーティングが支援者にとって安心して意見を述べることができる場になったことで、教える活動だけでなく、教室の運営にも積極的にかかわる姿が見られるようになった。教室の目的について共通理解が深まり、支援者の姿勢が変化した事例の一つ。

教室ひとくちメモ

箕面市国際交流協会交流型日本語学習支援 ひまわり

成り立ち 平成20(2008)年に国際交流協会の事業としてスタートした。豊能エリアの日本語教室。

大切にしていること

- ・支援者との会話を中心に外国人市民の日本語学習への支援を行うとともに活動を通して、外国人市民が抱える課題解決に向けてともに学び、考える地域の居場所づくりを進めること。
- ・未就学児を連れて参加できる日本語学習の場づくり。

事例3

受入可能な学習者数を増やしたい

ーグループ学習を導入ー

事例のあらまし

学習者が増えてきているが、教室のスペースが足りず、受け入れができなくなっていた。そこで少人数のグループ学習を導入し、支援者が複数の学習者の対応をすることで受入人数を増やすことを考えたが、グループ学習用の実践的な教材の開発が、課題となった。日本語講師、支援者、元学習者が協力して教材を作成し、加えて支援者向けの教材活用の手引きも編集した。これらの作成過程は、学習者受入数の増加のみならず支援者の連携強化にもつながった。

課題 受け入れられる学習者の数を増やすには

・学習者が増加して新しい学習者が受け入れられなくなってきた。

経過 受け入れる方法を様々な観点から検討

・「学習形態は？」
・「教材は？」
・「支援者養成は？」
など学習者を受け入れる方法を関係者が集まって検討。

成果 グループ学習を導入し学習者受入数が増加

・日本語講師、支援者、元学習者が一緒になって作成した教材※や支援者手引きを活用してグループ学習を実施している。そのことにより学習者数の増加や支援者の連携強化につながった。

ここがポイント！ここから学んだ！

できるだけ多くの学習者を受け入れることができる方法（対話型少人数クラス）を実施し、受入可能な学習者数を増やした事例の一つ。

※テキスト及び手引きの作成は、平成26年度文化庁「生活者としての外国人」のための地域日本語教育実践プログラム（A）を活用し取り組んだもの。以下のURLからダウンロード可能。

http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/seikatsusha/h26_nihongo_program_a/index.html

日本語交流活動教材『にここ』

地域を知り、関心や愛着を持ってもらえるテーマを盛り込み、日本語を通して共に学び、楽しめるテキスト。

教室ひとくちメモ

公益財団法人吹田市国際交流協会（SIFA）にここ日本語

成り立ち 国際交流協会＜平成3（1991）年設立＞の事業の一つとして、平成26（2014）年11月にスタートした。三島エリアの日本語教室。

大切にしていること

- ・地域で暮らす人々が「ともに学ぶ」という姿勢。
- ・身近な話題についてたくさん話し、たくさん聞く中で、日本語を習得し、相互理解を深めること。
- ・学習者も支援者も笑顔で楽しく活動できること。

事例 4

すべての支援者に運営に 関わってもらいたい

－円滑な教室運営のために情報を共有－

事例のあらまし

教室の運営に関わっている人と支援者が互いの活動を十分に理解できてはいなかった。そこで、運営や学習の活動内容を支援者全員で共有できるよう書式を作成した。支援者登録カード、学習者登録カード、学習記録表、また運営関係（総務、会計、広報）の書式を定めて文書化し、その後電子化してホームページにアップロードした。これらの情報を互いに共有することで教室の円滑な運営に関する意識が高まった。

課題 運営に関わる活動内容と学習に関わる活動内容を共有したい。

・運営に関わっている人と支援に関わっている人がお互いの活動について理解できていなかった。

経過 運営や学習に関わる活動記録の様式を作成

・取り決めの文書化
・月刊紙と HP の活用
・教室活動に関わる人が情報を共有しやすいよう学習記録表や会計の書類を統一した。

成果 すべての情報を共有する

・統一したすべての書類を電子化し、全員が共有できるようにすることにより運営に関わろうとする意識づくりにつながった。
・波及効果として、HPからの入会者が増加した。

ここがポイント！ここから学んだ！

学習に関わる活動と運営に関わる活動の内容を共有することで、支援者全員が運営にかかわる意識づくりができる。資料はすべてホームページにアップロードし、知りたい内容や見たい内容を支援者全員がパスワードを入力することにより、見ることができる。運営状況や活動内容について支援者全員が共有できるシステムを構築した事例の一つ。

教室ひとくちメモ

海外協力グループ "クスクス"

成り立ち 平成 11 (1999) 年 2 月、高槻市社会福祉協議会ボランティアセンター内に開設。
三島エリアの日本語教室。

大切にしていること

- ・外国人市民に日本語学習のお手伝いをし、いろいろな交流を通じてお互いの文化を学び合い、相互理解と国際交流を深め、また外部団体との協働事業に参加し、相互支援と協働のまちづくり、人づくりに貢献する。
- ・日本語支援者、学習者共に約 100 名を越す規模の教室を円滑に運営していくために活動内容や運営内容について支援者が誰でも知りうるように、あらゆる必要な書類、書式を整備する。

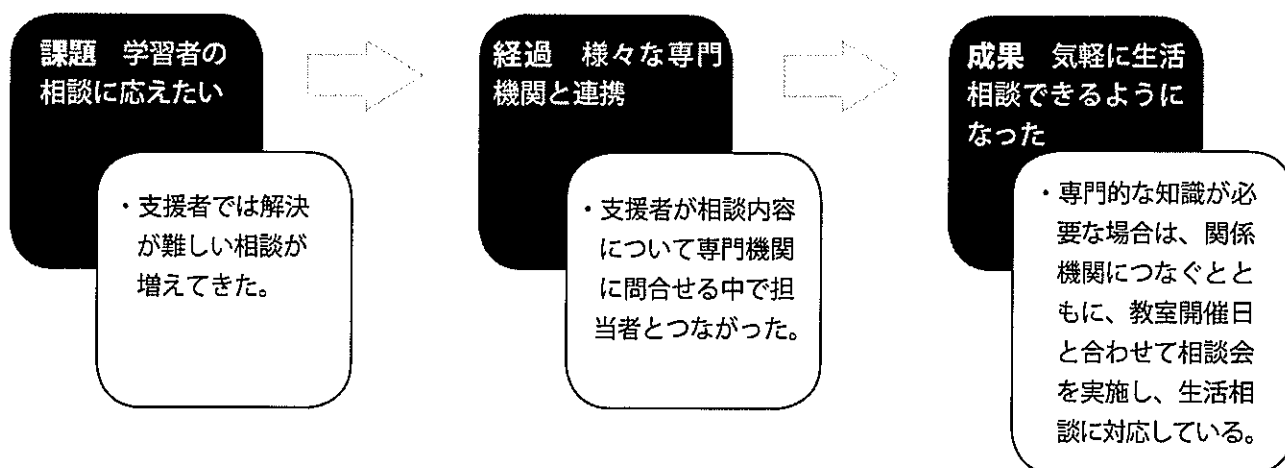
事例5

学習者からの相談に応えたい

—専門機関とつながり悩みを解決—

事例のあらまし

教室では、学習に関すること以外にも相談をうけることがあり、支援者や教室担当職員で対応しているが、なかには、支援者では解決が難しい相談もある。教室ではこういった相談に対しても、支援したいという思いがあった。市役所や教育委員会等に相談の問い合わせをする中で、各機関と連携・協力できるようになり、現在では専門的な知識が必要な相談については、つながった関係機関を学習者に紹介している。また、教室の開催日に合わせて、大阪府国際交流財団（OFIX）等の「外国人相談会」を実施することにより、気軽に生活相談ができるようになった。



ここがポイント！ここから学んだ！

さまざまな市民・団体・組織とつながることで、学習者の相談に対応している事例の一つ。

※公益財団法人大阪府国際交流財団（OFIX） <http://www.ofix.or.jp/>

教室ひとくちメモ

四條畷市 にほんご教室

成り立ち 平成9（1997）年4月1日開設。市内及び近隣市在住の日本語を勉強したい人や外国籍または外国にルーツをもつ人を対象としている。大人だけではなく子どもを対象にした教室も同時開催している。北河内エリアの識字・日本語教室。

大切にしていること

- ・日常生活において「よみ」「かき」「ことば」など、日本語ができずに困っている地域で暮らす外国人住民などの日本語の習得と文化の学習、学習者同士の情報交換、市民との交流を支援すること。
- ・学習者が日本で暮らす中で抱える不安や悩みなどを気軽に相談でき、ほっとできる居場所作り。

事例 6

支援者を増やしたい

—継続してもらえる支援者を育成—

事例のあらまし

学習者が多くなり、支援者が足りない状況となったので、市の広報媒体（広報誌、ホームページ、公民館だよりなど）に支援者募集の記事を掲載してもらい、支援者を集めている。応募のあった人全員に教室の見学してもらい、教室の理念や運営方針等に納得いただければ、支援者登録をしてもらう。また、定期的にスキルアップのための講座を実施し、支援者には全員受講してもらう。このような取組によって、支援者となることへの不安や気になっていたことが解消されて、支援者を確保できている。

課題 支援者を増やしたい

- ・学習者が多くなり支援者がたりない状況があった。

経過 広報媒体で支援者を募集し全員受講の講座を設ける

- ・応募のあった人全員に教室見学をもらい、講座も受講してもらう。

成果 活動を継続する支援者が育成される

- ・講座を受講して教室の方針を理解し、納得して支援者登録する。そのため、支援者の不安が解消され、教室の課題も共有されて、活動の継続につながっている。

ここがポイント！ここから学んだ！

識字・日本語教室の主役である学習者のために何ができるかについて、教室主催者や支援者が課題を共有することが大切。単に支援者の数を増やすのではなく、学習者目線で学習者と共に考える姿勢を大切に支援者養成に取り組んでいる事例の一つ。

教室ひとくちメモ

四條畷市 にほんご教室

成り立ち 平成9（1997）年4月1日開設。市内及び近隣市在住の日本語を勉強したい人や外国籍または外国にルーツをもつ人を対象としている。大人だけではなく子どもを対象にした教室も同時開催している。北河内エリアの識字・日本語教室。

大切にしていること

- ・日常生活において「よみ」「かき」「ことば」など、日本語ができずに困っている外国人住民などの日本語の習得と文化の学習、学習者同士の情報交換、市民との交流を支援すること。
- ・学習者が日本で暮らす中で抱える不安や悩みなどを気軽に相談でき、ほっとできる居場所作り

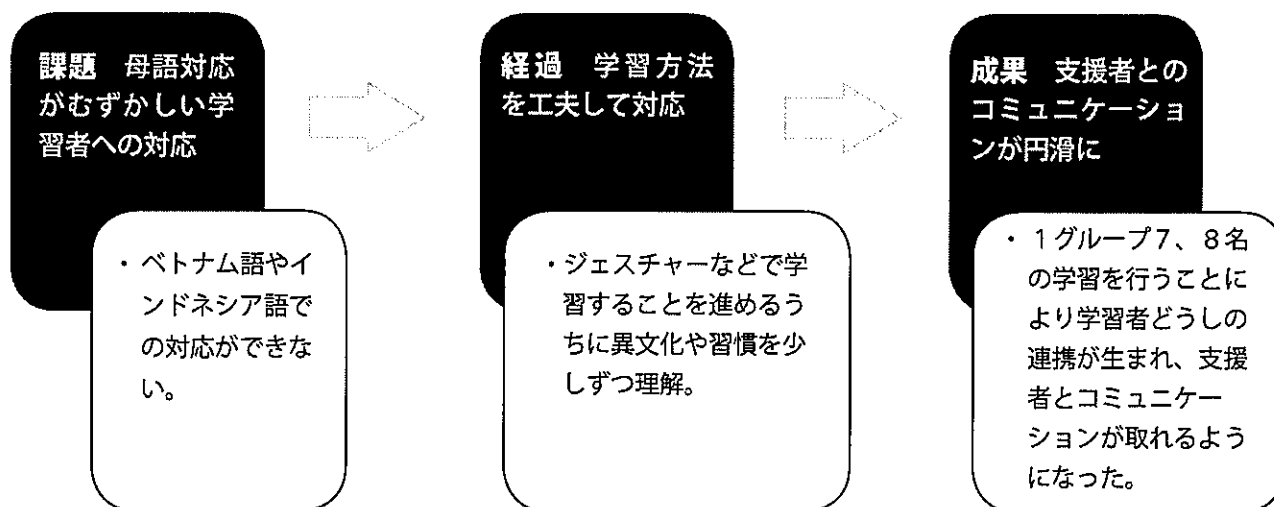
事例 7

母語対応がむずかしい学習者に対応したい

－支援方法を工夫し、学習者の状況に対応－

事例のあらまし

近隣の企業が技能実習生を受け入れるようになったこともあり、ここ2～3年でインドネシア人、ベトナム人など母語対応がむずかしい学習者が急激に増加した。各言語ができる支援者がいない中、ジェスチャーなどで「やさしい日本語」の学習を進めるうちに学習者との相互理解が少しずつできるようになってきた。また、グループ学習を行うことにより、グループの中の一人が支援者の言うことを理解すれば、グループ全員に伝わりコミュニケーションが円滑にできるようになった。文化庁の「カリキュラム案5点セット」※や他教室の取り組みを参考にして、学習者への支援方法を深めている。



ここがポイント！ここから学んだ！

学習者の立場になって支援者、教室を開催している施設の指定管理者と一緒に考え、グループ学習を取り入れたり、学習者が主役になる国際交流フェスタ（お国自慢、日本の遊び、スピーチ大会などの異文化交流会）を開催したりするなど、媒介語なしでも学習者が安心して参加できる環境づくりをしている事例の一つ。

※文化庁「カリキュラム案5点セット」：<http://www.nihongo-ews.jp/infomation/curriculum>

教室ひとくちメモ

大東市 日本語読み書き講座

成り立ち 平成18（2006）年開設。北河内エリアの日本語教室。行政、教室を開催している施設の指定管理者、支援者が一体となって運営。

大切にしていること

- ・日常生活の中で「よみ」「かき」「ことば」など、日本語での会話や読み書きに困っている外国人住民の日本語習得の支援をすること。

事例8

子育て世代の学習者を支える 支援者を見つけたい

ー公民館と連携して支援者を養成ー

事例のあらまし

国際結婚や外国人居住者が増える中で子育て世代の学習者も多くなってきた。そのような学習者へのサポートができる支援者の確保と、現在活動中の支援者の意識の再確認を目的に、「日本語ボランティア講座」を企画。公民館へ開催を打診し、公民館公開講座として実施することとなった。広く周知することもでき、教室の広報にもつながった。実施した公民館も講座の必要性を感じ、次年度から公民館が講座を企画検討し、教室と協力して実施することとなった。

課題 子育て
中の学習者をサ
ポートできる同
世代のボラン
ティアが少ない

・国際結婚などで
子育て世代の学習者
が多くなってき
た。

経過 日本語
ボランティア養
成講座の企画を
作成し、公民館
へ開催を打診

・ボランティアの確保と
スキルアップを目的と
した企画を、広く市民
に周知できる公民館に
持ち込み開催を依頼。

成果 公民館主催
公開講座として継
続実施

・定員を上回る応募が
あり、市民の関心の
高さがわかった。
・支援者を確保できた。
・教室周知にもつな
がった。

ここがポイント！ここから学んだ！

支援者の確保、スキルアップを課題に挙げている教室は多い。しかし、支援者の確保の方法がわからない、また既存の支援者のスキルアップ研修をしたいが、民間主催の教室の場合は自分たちだけで研修を企画、実施するには経費的、時間的にも難しいのが現状。

本件は、行政、教室がそれぞれの立場で生活者としての外国人をどのようにサポートしていくか、多文化共生社会に向けてどう取り組んでいくか、お互いの特性を生かして協力関係を築くことで課題解決に近づくようになった事例の一つ。

教室ひとくちメモ

てとてとクラブ

成り立ち 平成10（1998）年公民館の公開講座をきっかけに立ち上げ現在に至る。中・南河内エリアの識字・日本語教室。

大切にしていること

- ・日常生活の中で、ストレスを抱えて生活している外国人住民の方々がのびのびとくつろぎ、一人の人間として尊重される場所を提供すること。
- ・国籍や人種や言語などの違いを超えて、出会い、向き合い、理解し合うように努力する双方向性の関係をつくっていくこと。

事例 9

高校進学をめざす学習者に対応したい

—教育委員会、中学校と連携し、受験をサポート—

事例のあらまし

母国の中学校を卒業後（9年の課程終了後）に来日したため、日本の中学校に通えず、日本語の読み書きができない学習者が来室した。日本語教室で、まずは日本語を学習。高校への進学を希望したため、国際交流協会が受験用の教科学習支援のボランティアを探して、受験対策をサポートした。さらに市教育委員会の協力を得て、通訳付きの進路ガイダンスへの参加や大阪府教育庁教育振興室高等学校課への相談などを行った。近隣の中学校の協力も得て、学習面でのアドバイスを受け、「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜※」で高校を受験し、合格した。

課題 高校進学希望の学習者への対応

- ・母国の中学校を卒業後に来日したため、日本の中学校に通えず、読み書きができない学習者が来室。

経過 まず日本語教室で日本語を学習

- ・学習支援ボランティアとの学習や、通訳付きの進路ガイダンスに参加する等、受験対策を実施。

成果 日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜で高校を受験

- ・市教育委員会、中学校と連携し、学習面や受験方法などのアドバイスを受け、高校を受験し、合格。

ここがポイント！ここから学んだ！

母国の中学校卒業後（9年の課程終了後）に来日し、高校進学をめざす子どもが増えており、地域の日本語教室に通うこともある。しかし、支援者だけの対応では高校受験に関する情報や知識に限りがあり、支援者という立場でどこまで関われるかという点でもハードルが高い。日本語教室だけでの対応でなく、国際交流協会への相談や各市町村教育委員会への相談も含め、連携をとりながら行い、進学支援につなげている事例の一つ。

※「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜」：

<http://www.pref.osaka.lg.jp/kotogakko/gakuji-g3/tokubetusenbatu.html>

教室ひとくちメモ

とんだばやし日本語よみかき教室

成り立ち 平成4（1992）年5月公民館講座として日本語教室を開設。平成14年（2002）年からは（特活）とんだばやしの国際交流協会が公民館と協働して、週2回の日本語教室を運営している。その他、国際交流協会単独でも週3日、日本語教室を開催している。中・南河内エリアの日本語教室。

大切にしていること

- ・日本語学習の場であるとともに、外国人市民のほっとできる居場所であること。
- ・教室の主役は学習者であること。
- ・できるだけ生活密着型の学習内容であること。
- ・学習者同士の相互学習（教え合い）を追求すること。
- ・「教えたい」「教えられる」ではなく、「教えることは学ぶこと」であることを身につけて支援すること。

事例 10

乳幼児を連れた学習者に対応したい

—保育ボランティアと連携し学習に集中—

事例のあらまし

乳幼児を連れた学習者の参加に対応するため、当初は日本語教室の支援者や学習者である母親本人が、乳幼児の世話をしていた。しかし、学習に集中できず、困る学習者もでてきた。教室を主催している公民館が保育付き講座のために保育ボランティアを養成していることから、保育ボランティアと日本語教室が連携することになった。

課題 乳幼児を連れた学習者への対応

- ・乳幼児と一緒に学習していて学習者が集中できていなかった。

経過 公民館の働きかけ

- ・公民館に保育ボランティアがあることを知り、公民館につないでもらえるよう依頼した。

成果 保育ボランティアとの連携が実現

- ・保育を気にせず、教室に参加できるようになり安心して学習できる時間が持てるようになった。

ここがポイント！ここから学んだ！

「乳幼児を連れた学習者への対応」を課題と考える日本語教室に保育ボランティアが入ることで、学習者は、集中できるようになった。保育者にとっても外国につながる子どもを保育する経験となり、多文化理解が進む一助となった。公民館が両者を仲介した事例の一つ。

教室ひとくちメモ

貝塚市立中央公民館 日本語会話よみかき教室

成り立ち 平成8（1996）年に開設。泉州エリアの日本語教室。

大切にしていること

- ・学習者の気持ちに寄り添い、社会的制約を受けやすい、女性、外国人、非識字者に対し、学習を保障すること。

3章 防災に関わる取組事例

「防災体験バスツアー 地震・防災を体験しよう！」を企画

とんだばやし国際交流協会

取組みの趣旨

南海トラフ大地震などへの備えが緊急の課題となっている昨今、近隣に住む外国人市民が、

- ①発災時の避難場所や避難行動を確認する。
- ②大阪市立阿倍野防災センターにおいて地震をはじめとする災害に対して知識と対応の仕方を体験する
といった学習体験を通して、地震などの災害に対する関心を深め、災害への備えを進める契機とする。

事 例

1. 課題

外国人市民は地震などの災害の際の対応方法をあまり知らないため不安を感じており、また、入手できる外国語対応の災害情報も少ない。

2. 実施内容

講座「防災体験バスツアー 地震・防災を体験しよう！」を日本語教室学習者等を対象として企画、実施した。講座は、協会事務所での座学と、大阪市立阿倍野防災センターでの体験で構成されている。

- ①「出前講座」を活用して市役所から講師を招き、ハザードマップを使って防災に関する学習をした。（地震が起こるメカニズムと近隣での危険度、地震への備えと非常持ち出し品の説明、避難場所の確認など）
- ②上記①の学習の後、大阪市立阿倍野防災センターへ移動し、火災発生を防ぐ行動、煙の中の避難行動、消火器を使っでの消火活動、通報の体験、震度7の地震体験を行った。

3. 成果

参加者が地震への備え、避難方法などを学び、具体的にどのような行動をすればよいかを確実に知ることができた。また、外国人住民の防災訓練の必要性を広く認識し、日本人住民と外国人住民と一緒に防災学習を行い話し合い協力し合う機会となり、災害への備えを進める一歩となった。

ここがポイント！ここから学んだ！

本事業については、大阪府国際交流財団（OFIX）の「外国人市民及び災害時通訳・翻訳ボランティアのための防災・災害時訓練共催事業」を活用して、OFIX との共催事業として実施。富田林市の「とんだばやし発見出前講座」を利用した学習を行った後、大阪市立阿倍野防災センターへの防災体験バスツアーを実施した。

外国人住民向けの防災訓練を企画・実施している団体は他にもあると思うが、市の出前講座などの利用も一つの選択肢としてあげられるように思われる。行政や他団体との共催や、日本人住民と一緒に地域で行う防災訓練に参加する等、それぞれと連携をもちながら、継続して行うことが災害の備えにつながると思われる。

『外国人住民のための避難生活ガイドブック』やさしい日本語版を発行

かいづか国際交流協会

取組みの趣旨

地域に居住する外国人住民と日本人住民が、災害発生時に共に支え合えるようにするために実施した防災講演会の内容から学んで、地域の『外国人住民のための避難生活ガイドブック』を発行した。

事 例

1. 課題

過去の災害発生時に日本語が理解できなかったり、食文化が違うことで支援品を使うことができず困っている外国人住民がいた。また、日本人住民も外国人住民が何に困っているかについて理解が進まず円滑な助け合いができなかった。

2. 実施内容

学習者に災害の事を知ってもらい、防災に向けてともに地域をつくる意識を高めようと、講演会を実施した。災害時に現場に駆けつけて問題点を収集・分析した経験のある講師に、外国人住民との共生社会のために地域住民がふだんから考えておくべきことについて指摘してもらった。

講演で学んだ事柄を地域住民で共有し、地域づくりにつなげるにはどうすればよいかを話し合い、講演で紹介された「外国人住民のための避難生活ガイドブック（静岡県作成）」を参考に、地域にあわせた冊子を作成し配付することを考えた。発行県庁の了解を得て、地域版の冊子発行にこぎつけた。

3. 成果

『外国人住民のための避難生活ガイドブック』を学習の場で使って説明することにより、支援者も学習者も災害に対して心構えを持つことができた。また日本人住民と外国人住民と一緒に防災学習を行い、協力し合う機会になっている。

ここがポイント！ここから学んだ！

講演を実施して終わりにせずに、学んだことを具体的な活動に結びつけたことが、課題解決につながっている。国際交流協会が『外国人住民のための避難生活ガイドブック』を発行し、市の危機管理課に監修してもらうことで、行政とも連携している。

大阪府「平成 29 年度 社会とつなぐ日本語教室運営講座」に参加した方々が、府内の教室で実施したこと、工夫したこと、考えていることを共有しました。そこで出された意見について、以下のとおり紹介します。

大阪府 平成 29 年度 社会とつなぐ日本語教室運営講座
第 2 回「災害と外国人住民」ワークショップより

◆ 防災講座について

- ・災害対策についての講座を開く際には、あらかじめ外国人学習者の考えていること、不安に思っていることを聞いて、それをまとめる。
- ・外国人学習者と支援者で話し合っ、災害時にどんなことが必要か考える。
- ・外国人生活者が、どんなことを知りたいかというニーズを把握して講座を考える。
- ・外国人生活者に対して“日本の災害時の慣習”について伝え、一緒に考える講座を開催する。
- ・定期的な防災教室が重要だという認識はあるが、実施してもなかなか参加者が集まらない。どうすれば防災に関心をもってもらえるか。クラスによっては防災をテーマとして取り上げて学習している。
- ・文化庁の生活漢字の中から「災害」「病気」などの資料を準備して、絵を見ながら、特別な漢字、意味を勉強する。こんな時はどうするかを具体的に話す。例えば「119 番」へ電話をかける練習をした。
- ・文化庁の生活漢字「災害」の章を資料に、災害関係の特別な日本語（例えば警報、避難など）を紹介した。「病気」についても同様に学習した。これらを、1つのきっかけとして、震災の経験等を話し、地域の避難所の確認なども行った。ただし、まだ、学習者はあまり身に迫った話としては受け止めていない点が課題。
- ・防災の地域づくりについて「自分ができること」ではなく「自分たち『みんな』ができること」を考える必要がある。
- ・日本語を学ぶことで、学習者が、本来持っているさまざまな力を地域で発揮できるように支援をしていきたい。

◆ 避難訓練・防災訓練について

- ・自治会などで外国人の存在を意識していないケースがある。自治会の防災訓練には、外国人住民とともに行う必要がある。
- ・まずは災害時のために、教室での避難訓練をしたいと思う。
- ・学習者に主婦が多いので、日中の発災時のことをシュミレーションする。いつ避難すべきか、避難所はどこかなど。

◆ 情報について

- ・「災害情報」の共有の機会を教室で持つことが必要だ。
- ・台風の接近など警報が出ているときの注意点について、外国人学習者とともに言葉も含めて確認した。非常時の安否連絡の方法を教室で確認する。
- ・日本語教室と接点を持ち、情報共有することで外国人コミュニティとのつながりを形成できるよう取り組む。
- ・支援者に「非言語コミュニケーション、絵文字、ピクトグラム（視覚サイン）」について知ってもらい、外国人学習者に広める。

◆ 発災時には

- ・避難所で外国人に積極的にアプローチできるようにボランティア同士で話し合っている。
- ・災害時に避難生活が長期化すると、相談も多様化してくる。日本語の支援もより必要となるので、災害時も日本語教室が生活者としての外国人につながるよう体制を考えておく。

●日ごろから災害に備える

外国人のための防災ガイド（公財）大阪府国際交流財団

<http://www.ofix.or.jp/accept/disastersupport.html>



外国人住民の方が、地震に備えて普段から準備しておくこと、地震が起きた時の身の守り方等について、9言語（英語、中国語、韓国・朝鮮語、ポルトガル語、スペイン語、ベトナム語、フィリピン語、タイ語、日本語）でガイドブックにまとめています。

外国人のための防災ガイド（地震編）（公財）大阪府国際交流財団

（英日、中日、韓日、越日＜ベトナム＞、比日＜フィリピン＞、西日＜スペイン＞、葡日＜ポルトガル＞、泰日＜タイ＞）

<http://www.ofix.or.jp/accept/earthquake.html>

やさしい日本語活用冊子 大阪府生活文化部都市魅力創造国際課

<http://www.pref.osaka.lg.jp/kokusai/kotobanokabe/index.html>

大阪生活必携（公財）大阪府国際交流財団

<http://www.ofix.or.jp/life/guide.html>

●緊急の災害情報をうけとる

おおさか防災ネット（大阪府）

<http://www.osaka-bousai.net/pref/index.html>



災害情報を英語、中国語（簡体）、ハングルで発信しています。

防災情報メール（おおさか防災ネット）

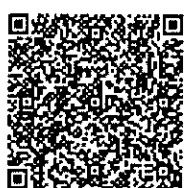
<http://www.osaka-bousai.net/mobile/pref/MobilePreventInfoMail.html>

●情報提供のための多言語と日本語のツール（支援者向け）

多言語情報等共通ツールの提供

一般財団法人自治体国際化協会（クレア）

<http://www.clair.or.jp/j/multiculture/tagengo/saigai.html>



日本に在住している外国人は日本語が不自由であったり、日本の生活環境に不案内であったり、災害のことを知らなかったりすることが多いため、災害弱者と位置づけられています。クレアでは、地域国際化協会、自治体などによる円滑な情報提供を支援することを目的として、平常時から災害時対応を考え、多言語支援体制の構築に活かす「災害時の多言語支援のための手引き」や、多言語による文字情報の提供が可能な「多言語表示シート作成ツール」の提供など、災害時外国人支援のための情報を発信しています。

気象庁のサイト

「緊急地震速報・津波警報の多言語辞書」の作成について

<http://www.jma.go.jp/jma/press/1510/29a/tagengo20151029.html>



緊急地震速報に加えて、地震発生時等に迅速な対応が必要な情報である、津波警報を多言語で提供する際に必要となる翻訳表現を作成し、『緊急地震速報・津波警報の多言語辞書』としてまとめました。

減災のための「やさしい日本語」

弘前大学人文学部社会言語学研究室 減災のための「やさしい日本語」研究会

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ1a.htm>



「やさしい日本語」とは、普通の日本語よりも簡単で、外国人もわかりやすい日本語のことです。これは、地震などの災害が起こったときに有効なことばです。1995年1月の阪神・淡路大震災では、日本人だけでなく日本にいた多くの外国人も被害を受けました。その中には、日本語も英語も十分に理解できず必要な情報を受け取ることができない人もいました。そこで彼らが災害発生時に適切な行動をとれるように考え出されたのが「やさしい日本語」です。